

ムリーでの仕事は、鉄道工事を
初め大工、左官、農耕、伐採等
多種にわたる。途中病氣療養の
ためオカ収容所へ

昭和二十三年四月

ホルモリン二一七収容所へ

以後、引揚げまでここで生活

昭和二十四年十一月

ナホトカより舞鶴へ復員

飢え、極寒、重労働のシベリアの生活は、およそ人間が生き延びるのには程遠いところであった。そのようなどころで、上羽淳一郎氏が咯血の病身でありながら生還できたことは、不思議な気がする。恐らく彼の身体の内には不屈の精神力が秘められているに違いない。

さらに「己を知る」というのだろうか、シベリアではくよくよしないことに気をつけたと御本人が言っているように、運命に逆らわなかったことがよかったのだろう。

(熊本県 高瀬 潤吉)

二二七収容所の点描

熊本県 家人 壯介

すき間風に起こされた第一夜

昭和二十年十二月四日、急にトラックがとまった。

「ダワイ、ダワイ」とソ連のカンボーイの声に促されて、ほろを押しのけてトラックから降りる。外は薄暗く、周囲は簡単な木さくに囲まれている。隅には望楼があり、銃を持った警備兵が見下ろしている。いよいよ捕虜収容所に入れられたという実感を持った。寒さと疲れのため、指示された二番目の丸太小屋に入り、寝る場所を決めると、着のみのまま背のうを枕にごろりと横になった。ここが我々が住むことになる二二七収容所であると、後でわかった。

翌朝、丸太の壁のすき間から吹き込む、雪まじりのすき間風に起こされた。顔から肩にかけて痛いような寒さを感じ、ここはどこだろうかと辺りを眺めようと

したが、目が開かない。かぶっていた防寒帽の開いている顔の部分は、口元、鼻などすべて吐く息が白く凍りついている。まつ毛も凍りついて目が開かない。

外の気温は零下三〇度くらいには下がっているであろう。このようなことは、北満・ハイラルの軍隊でも行軍のときに経験したことがある。慌てずに、指でまつ毛の氷をゆつくり溶かしながらしごいて取り、身を起こして部屋の中を見回した。薄暗い部屋の中は四方に二段ベッドがあり、みんなは軍服のまま所狭しと重なるようにして寝ていた。しかし、ほとんどの者が起きて寒さにうずくまっている。

明かりのない部屋の中は死んだように静かで、真ん中に据えられた四角いペチカの炎は、ゆらゆらと小さく消えかけていた。まきはもう残り少なくなっていた。このままここで骨を埋めるのかもしれないと思うと、嫌な予感にさいなまれ、身も心も凍りつくような思いであった。

かくして、昭和二十年十二月五日（一九四五年）、世界最強を誇った精鋭関東軍の中でも、その中核であつ

た下士官の集合隊である第一五〇作業大隊のシベリアでの第一日は、二一七捕虜収容所において不安と焦燥の中に明けた。

黒パンと飯ごう

朝食は黒パンのみの配給であつた。当番兵が天幕に入れて抱えてきたパンは、濃い茶色の大きなれんがのようなパンだった。重さは三キログラムほどもあつたろうか。それを二十人くらいで分けるよう配られた。しかし、刃物をすべて取り上げておいて、れんがのようなパンをどうやって分けろというのか、思案していると中に一人、小刀を隠し持ったチャッカリ者がいた。各人に分配すると、たばこの箱ほどの大きさになった。コウリヤンなどの雑穀でつくられているようで、もみ殻が多くまじっていてずっしりと重い。外側のかたいところは歯が立たないくらいだ。食べてみると、もみ殻が多いので口の中を傷つけそうである。味は油のにおいがして酸味が強く、干からびたかたい蒸しパンのようで、食われたものではないが、腹持ちはよさそう

パンだけでは足りないのです、みんなそれぞれ飯ごう炊飯の準備を始めている。満州で捕虜になってから、今から何が起こるかわからないので、食糧だけは大切に持ってきた。米、カンメンポ（乾麵包、非常食）、塩などを持っていたので、当分は支給された食糧の不足を少しは補うことができるが、その後のことになると思います。

飯ごうに雪をかたく詰めて、ペチカで溶かして水をつくり、背のうの中から靴下に入れた米を取り出してペチカに乗せておかゆをつくった。ペチカの上は、はみ出さんばかりに飯ごうがぎっしり乗っている。その周りには、飯ごうを盗られないようにと、それぞれが首を伸ばして自分の飯ごうを見守っている。ペチカを燃やすまきの炎がランプがわりで、部屋の中は暗い。

そんな中で、ちよつとでも油断して目を離すともう飯ごうはなくなっている。飯ごうこそが抑留中の唯一の食器で、これがなければ三度の食事をもらうこともできないので深刻な問題であった。背に腹はかえられないと他人のをかっぱらう。堂々めぐりの繰り返し

続けられた。シベリアの捕虜の多くが経験したことではあるが、昨日までの誇り高き関東軍の軍人としてはいかにもわびしく悲しい出来事である。

おかゆはできたがおかずはない。岩塩のかたまりをかじりながら朝食を済ませた。シベリアの最初の食事は、このようにして混乱の中に明け暮れた。

生き延びるため、食事に關しては醜い争いが絶えなかった。数日後には、炊事場が使えるようになり給食が始まったが、食事に対する関心が一番強かったのでいろいろな問題が次々と起こって炊事班を悩まし続けた。まずいながらも、黒パンは捕虜の主食であり、厳しい環境の中で命を支えてくれた貴重な糧であった。それだけにまた、黒パンにまつわる醜い争いやエピソードも数多く生まれた。

入所して、しばらくの間は丸ごと支給されたので、いろいろな分配の方法が行われた。目分量で切り分けたパンをジャンケンで分ける。くじ引き、またてんびんをつくって重さによって分けるなど、工夫を凝らして分配したが、どんなやり方にせよ、小さい一かけら

のパンくずをめぐってごたごたが当分は続いた。二十一年春ごろから炊事班の谷口（現、神沢）が、定量（三百五十グラム）をはかりで計量して、個人分配するようになってようやく落ち着いた。

このころ、今までソ連兵の略奪を逃れて大事に持ってきた時計や万年筆なども、空腹に絶えかねて黒パンと交換した。最後に残った持ち物といえば飯ごうと背のうだけになった。

近くにドイツ人の捕虜がいたことがあるが、ソ連人と交換したパンの分け方にも民族性を感じられ、興味深く思えた。ドイツ人は、個人の持ち物でもみんなで交渉して有利に交換し、グループで分けて食べていた。彼らは団結心が強く、誇り高いドイツ民族としてのプライドを失わず、ソ連人に対しても少しも臆することなく、敗れたとはいえ敵国の利益になるような仕事はしないと、意識的に作業をサポートしていた。

一方、日本人は、自分一人で人目を避けて交換して持つて帰り、寝台の下にしまい込んだ。親友に分けてやるほかは、夜みんなが寝静まるのを待つて、一人で

毛布をかぶつて、少しずつ何日もかけてモグモグと食べていた。しかし用心しないと、残ったパンを枕がわりの背のうの中に隠しても、朝起きたときにはもうなくなっていることもあった。

また作業の面でも、ノルマ達成に対する無理な強要に、初めのころは敵国ソ連に協力するかと抵抗を試みたが、ノルマ完遂者にはパンやたばこを与えるという策略に、次第にソ連の要求にも従うようになり、作業班長の中には自己の保身のため、ソ連監督の要求を先取りして部下を叱咤する者さえ出てきた。しかし二一七では、ほかの収容所で見られたような大隊幹部による極端な食糧のピンハネや部下への虐待などはなく、また反幹部闘争やつるし上げのような激しい事態は起こらずに済んだ。

入ソ当時の日本人は、かつて経験したことのない敗戦のショックと過酷な生活環境の中にあつて、精神的にも肉体的にも自己喪失の状態に陥つていたとはいえ、ドイツ人と比べても日本人の弱さの一面を嫌というほど感じた。

第二次大戦が始まったころ、ヤンキーは個人主義、

自由主義の国だから自分勝手に厭戦気分が高まり、日本の旺盛な大和魂と一億一心の団結心の前にもろくも崩れ去るであろうと聞かされていたが、敗戦、抑留という試練に遭って、誇り高い日本人としてのプライドをきれいに忘れ去り、自分一人生き延びるためにきゅうきゅうとしている日本人こそ、偏狭な個人主義の持ち主であると思い知らされた。

黒パンは、終戦時の混乱期を過ぎ、またソ連の食糧事情もよくなるにつれ、量も質も改善された。捕虜には食べる楽しみを与えてくれた唯一の食べ物であった。

二二七収容所では、二十二年夏になって収容所付属のパン工場ができて、ソ連人の指導で福田や押田らが焼くようになり、次第に良質のものができるようになった。二二七のパン工場では、ソ連人や近くの二一九、二一九収容所などのパンも焼いていた。

二十三年ころになると上質の麦粉でつくった。当時、白パンと称していた白い黒パンが、ソ連の革命記念日などに捕虜にも配給されたことがあった。また二十三

年に収容所内にマガジン（売店）ができてからは、そこで我々も買えるようになった。

入ソして初めての冬は、精神的、肉体的に死を覚悟して迎えた。それは劣悪な環境と乏しい食糧、そして初めて経験する零下三〇〜五〇度という過酷な条件下で抑留生活の中で最も苦しい時期であったが、二二七収容所においては栄養失調による死亡者を出すこともなく、無事に乗り切れたことは不幸中の幸いであった。

それは、ソ連の関係者が、収容所長をはじめ比較的によいソ連人であったことと、日本側も大隊長はじめ幹部や隊員も穏健な良識者が多かったため、食糧問題や労働問題にしても、見苦しい混乱を起こさず、深刻な悲劇や怨念を残すことが少なかった。

氷運搬、まき運搬

二十年十二月の入所時は食、住の整備から始まった。大地すべて凍結し、雪の少ないシベリアでは炊事の水は川の氷に頼るほかはなかった。毎日一個中隊（二百名くらい）が天幕やあり合わせの袋などを持って、カ

ンボーイに監視されながら約一〜二キロメートル離れた川に氷取りに出かけた。川の氷は薄茶色に濁った所もあり、よい所を選んでつるはしで割るが、そのつるはしの重さに衰弱の激しい自分の体に気づいて驚いた。氷はあり合わせの天幕や麻の袋に入れて運んだ。二十キログラムくらいの重さなのに、何回かの休憩をとりながらやつとの思いで帰ってきた。

また一個中隊はまき採取に出かけた。二人引きのノコギリを持って付近の森の中に入ると、カラマツやトドマツの原始林の中は大小の倒木が重なり合っている。適当な大きさの倒木を選んで、まきの長さに切つて二人で担いで帰る。帰ってからオノで割つてまきをつくる。一日に使用するまきも、十数カ所のベチカ、炊事、浴場などに大量に要る。まきづくりは冬の重要な作業であった。

丸太小屋の修理にも一個中隊くらいが当たる。四百〜五百メートル余り離れたところにある製材所の跡に放置されたまま雪に埋もれた板の残材の運搬から始まった。厚さ二〜三センチ、長さ二メートルの板はずつ

しりと重い。小さいのは一人で、大きいのは二人で担いで帰った。当時の我々には骨身にこたえる重さで、五十〜六十メートル行つては休憩し、ふらふらしながら帰り着いたときには、体中に脂汗がにじんでいた。

丸太の壁のすき間には、森の中から取つてきたコケを詰めてすき間風を防いだり、防寒のため二重になっている天井や床の間には、製材所のノコギリくずや苔などを詰めて補修した。

一年目の冬は、初めて経験する零下四〇度の中で、心身の疲労、少ない食事と劣悪な設備、そして重労働に耐えねばならなかった。まさに生きる限界を超えた過酷な環境の中で、みんなが生きるために必死の努力をした。最も苦しい冬であった。

年が明けると、間もなく馬やそりが与えられ、水の運搬は、冬はそり、夏は馬車にボーチカ（大きいビールだるの形）を積んで運搬するようになった。このことは全員帰国するまで四年間毎日続けられた。

炊事の設備は古く傷んではいたが、かま場を応急修理して、入ソから数日にして三度の食事は炊事場でつ

くるようになった。最初は各小隊ごとにおけるマルミの食缶で、食事を部屋まで運んで各人に分配していたので、凍った通路で滑って食事をばらまくこともあって苦労していたが、やがて炊事場が完備し、パンも食事も食堂で個人に分配するようになって、食事のことについては量と質への不満を残しながら、やっと落ちついた。

二一七定食は満州産馬糧

二一七の定食は、朝はパンにスープ、昼と夜は雑炊である。この三度の食事の形は最後まで変わらなかった。スープといっても、初めのうちはかすかに色と味のついたみそ汁に大豆が五、六粒入っているだけ。雑炊は満州から持ってきたコウリヤンが主で、燕麦や雑穀を煮込んだものであった。たるの半分以上は澄んだ上汁になっているので、炊事班もよく攪拌して分配していたが、それでも後で底の方をもらったほうが得だ、いや、後で足りなくなると水で薄めていたのをおれは見たと、当分の間は食事についての苦情は絶えなかった。

初期の穀物はほとんどが満州から獲得したもので、馬糧などでないみのコウリヤン、燕麦や大豆が主なものであった。味噌も、ソ連人は大豆の腐ったものと言って食べないので、捕虜用に満州から持ってきたものだ。

当時は、ソ連国内でも四年間の独ソ戦と農業の不作で食糧事情は極度に悪くなっていた。ソ連人も捕虜とほとんど同じものを食べていたようだ。輸送用のトラックも少なく、道路事情も悪いところに、六十五万の捕虜を奥地へ奥地へと短期間に送り込んだ無謀さには、ただ驚くほかはない。日本人の捕虜のほか、ドイツ人の捕虜も三百五十万人も抑留されていたという。食糧はもちろん、生活環境などの考慮は全く無視して、ただ労働力の確保のみに焦ったスターリン独裁政治の恐ろしい一面を経験させられた。

この時期、ほかの収容所では栄養失調による死亡者が多かったのも当然である。二一七においては、残念ながら三人の犠牲者（伐採作業、電柱作業中の事故、踏切事故）があったが、栄養失調による死亡者が出な

かったことは不幸中の幸いであつた。

ソ連からの、穀物の質はともかく、肉、魚、野菜など捕虜の国際協定の定量が支給されるようになったのは、二十二年に入ってからである。そのころになつて、ようやく生きて帰れるという肉体的な自信と希望がわいて、精神的にも少しは落ちついた日を送ることができるようになつた。

「命の泉」クワスと松葉茶

福田のいたパン工場が二一七にできたことは幸いであつた。特に栄養面での貢献度が大きかつた。福田は二十一年春、二〇五分所よりソ連人（通称・ジャガイモ）に連れられてパン工場開設のために転入してきた。パン焼きがまをつくと同時に、押田らのパンづくりの経験者を募集して黒パンを焼き始めた。それまではホルモリンから毎日そりで運んでいた。そのため、そりが転倒した、あるいは途中でパンがそりから落ちた、といったは食事の時間に間に合わなかつたり、量も毎日違つていた。そのため食糧に関してはソ連側に、また大隊本部や炊事に対する不信感が根強くすぶつて

いた。

パン工場ができてから定量が確実に給食されるようになり、不満ながら食事に関して安堵感を覚えた。さらに、その後食堂の横に、国際法による捕虜の給与基準が掲示されるに及び、ソ連も国際法に従い捕虜の生命、人権に対して考慮せざるを得ない事態であるように感じ、今後のことについて少しは心安らぐようになった。

特にパン工場で特筆すべきはクワスの製造である。シベリアでは食糧の種類が限られている。黒パン、コウリヤン、麦と肉はほとんど羊肉、魚はニシン、サケの塩漬、特に野菜は少なく、ジャガイモやキャベツ、あるいはトマト、キュウリなどの酸っぱい漬物ピクルスがたまに出る程度で、新鮮な野菜はほとんどない。そのためビタミン欠乏症になることが心配だつた。それを解消したのが、福田らがつくるクワスと炊事でつくる松葉茶であつた。

松葉茶はソ連人が生活の知恵としてつくり出したもので、ビタミンCが特に多い松の葉を原料にしたお茶

で、松ヤニのにおいが強い水菓といった感じの飲み物であった。クワスは、燕麦粉を原料にした黒パンの生地（黒パンを焼く前の粉を練った粘土状）を加工発酵させてつくった酸味の強いヨーグルト状の飲み物で、ともに栄養価値は高いものの、シベリアの飢餓の中でしか飲めない代物であった。また、ソ連の軍医や収容所長の立ち会いの上強引に飲まされて、やっと飲んだ飲み物であった。しかし、飲みなれてくると黒パンと同じく独特の味と香りが忘れられず、毎日の朝食の後の飲み物としてなくてはならないものになった。それはまた、二一七収容所に栄養失調による死亡者を一人も出さなかった貴重な栄養剤であり、命の泉であった。

関東軍も勝てないシベリア冬將軍

シベリアでの第一日目は、所持品検査であった。ここに来るまでに時計や万年筆など、目ぼしいものは「ダワイ、ダワイ」と取られているので、今度は何が目的であろうか。

所持品検査は、中央の広場で中隊ごとに順番に行われた。横隊に並んで背のうの中を持ち物を見やすいよ

うに並べると、人事係ソロキンが一品ずつ手帳に記入していく。どんよりとした空の太陽はお月さまのように輝きがない。気温は零下二〇度近い寒さの中、手足が次第に痛くなってきた。凍傷にかからないように足踏みをしながら待っていた。

今までに紙に書いたものや刃物はすべて没収されていた。もう何でも調べてくれと開き直った。ソロキンは素手で品物を調べ、チビた鉛筆をなめながら手帳に書き込んでいる。この寒さの中で平気な顔をして何時間も続けているのだ。時々手をこすりながらもその耐寒力の異常な強さに我々は度肝を抜かれた。やはりソ連人は人種が違うように思えた。そして、零下五十度にもなるというこの地に、今から何年続かわからない抑留生活のことを思うと、身の縮む不安に襲われた。シベリアの冬將軍こそ、世界最強の軍隊である。

バム鉄道は、ソ、独、日三カ国の涙の遺構

ソ連は第二次世界大戦前、極東方面の資源開発、軍事力の増強などを推進するため、また既に限界にきていたシベリア鉄道の輸送力を補うため、第二シベリア

鉄道（バム鉄道）の建設を進めていた。その沿線に二一七収容所があり、バム鉄道建設のためにつくられた収容所であった。

バム鉄道は、バイカル・アムール幹線鉄道と言った。シベリア鉄道のタイセツトを分岐点として、バイカル湖の北を通り、終点コムソモリスク・ナ・アムールまでの四千二百キロメートルの建設が計画されていた。

戦前既にウスチクトまでは開通していた。またコムソモリスクからの工事も進められ、二一七収容所付近はレールも敷設されていたが、第二次大戦で工事は中断し、レールなどの資材は撤去されて、兵器の材料にされたという。建設用の道路とともに荒れた路盤だけが残っていた。

初めはソ連の囚人によって工事は進められ、そのときの収容所であったが、第二次大戦中にはドイツ人の捕虜が入れられていたようで、一五〇大隊が二一七収容所に到着したときには、まだ本部の建物にドイツ人が残っていた。

二一七収容所のある村は、マプリンスク村と言って、

駅はマプリンスク駅である。バム鉄道沿線のこの付近は、ホルモリー地区（ホルモリン又はフルモリーとも言う）第二支部に属し、コムソモリスクから五十〜六十キロメートル余り離れたところではないかと思われる。

入ソのとき、列車から降ろされたコムソモリスク郊外のドーフ辺りが第一支部で、第二支部はホルモリンの二〇一・二〇二収容所から二一七を通り病院のあったゴーリンまで、その奥には第三支部（カリマ、エボロン付近）、第四支部、第五支部と続き、一支部には十〜十五カ所の収容所が三〜五キロメートルの間隔で点在していた。ほとんどが直接間接にバム鉄道建設のため建てられた収容所である。

二一七の鉄道工事は、二十二年の秋ごろから路盤をつくる土木作業が始まり、多い日には伐採、馬搬出、製材所の各一個小隊及び雑作業を除いた全員が出動した。約四百人の作業員が四キロメートル余りの担当線路の工事に従事した。二十三年春にはソ連人によるレール敷設工事が始まり、マプリンスク村の駅は製材所

の横につくられた。夏には工事用列車が走るようになった。その後は線路保守の作業に少数の人員が毎日従事した。

また、線路はマブリンスク駅から分岐して、東南の方向にある木材工場の二二〇収容所まで約四キロメートルもつくられた。鉄道は、丸太や枕木、建築材などの木材製品の輸送が主体であった。道路は鉄道とはば並行してつくられており、食糧、日用品などはすべてトラックで輸送されていた。

マブリンスク村は、村といっても村落はない。住民もない。収容所とその関係者の住宅が点在して、その周辺にカントーラ（収容所管理事務所）、数カ所の収容所を受け持つ糧秣基地、糧秣や木材を運搬するトラックの基地、木材を山出しする馬の馬屋、機械器具を修理管理する器材庫、それにパン工場、少し離れたところに製材所と駅があった。

二十一年の夏には簡易発電所やソ連人用のマガジン（売店）ができた。日本人用のマガジンは二十三年につくられた。そのころは百%以上のハラシヨラボータ

も多かったので、給料をもらって白パンやたばこなどを買うことができた。初代の店長は鈴木敏雄であった。

また村にはソ連共産党から派遣された政治部員の少佐（マイヨール）が駐在して、ソ連人及び日本人の行政、治安、収容所管理、労働の能率及び安全、特に思想問題など一切の問題について、監視、指導し、犯罪の摘発処理又は民事の仲裁など、強力な権限を持つて目を光らせていた。日本人は直接会うことは余りなかったが、ソ連人の間では非常に恐れられ、彼のいるところではおとなしいソ連人であった。

私は事務所のまき割りに行ったことがある。彼の温厚で誠実な人柄はソ連人の間では信頼されていたようで、いろいろなもめごとや相談事の解決を頼みに来ていたようである。

二一七収容所は、昭和二十四年九月、最後まで残っていた団長佐藤泰示、糧秣係野見山政一、通訳浜田正、カントーラの犬飼義郎など数十名の人たちが、正門の扉を開め、くぎづけして帰国の途についた。これが二一七収容所の終焉であり、この後この収容所は再び開

くことはなかった。

一九五七年、強制収容に対する批判の高まりを恐れたフルシチョフは、全収容所を跡形を残さないように撤去した。かくして二一七収容所は、ソ連矯正労働収容所、ドイツ人捕虜収容所、日本人捕虜収容所と民族の変遷を経ながらバム鉄道の建設に寄与してきたが、ここで一切のビリウドを打つことになった。

日本人が従事したバム鉄道の長さは、四千二百キロメートルのうち三百六十キロメートルであった。

葉のないときの医者の悩み

入所時の軍医さんの苦労も大変なものであった。栄養失調、発熱、凍傷、けがなどの患者が多いのに加えて、下痢をする者が始まった。栄養失調の患者が下痢をすれば死につながる。当時は野草やキノコなど、何でも食えるものは口にしていたが、その中の毒草が原因で下痢患者が出た。

中田軍医は、ソ連側に食糧の増配を要求するとともに、栄養失調の患者に休養を指示するが、ソ連側軍医は三八度以上の熱か外傷がなければ病氣と認めない。

またノルマの国ソ連では、患者数にもノルマがあり、それ以上の患者が出ると軍医の成績にかかわり、下手をすると処罰されるので、なかなか作業を休ませることはしなかった。

責任感の強い中田軍医は、ソ連の女軍医リユーバ（通称・ダットサン）と口論しながらも、自分が実験台になり、付近の雑草を試食して毒草を探し出し、朝の作業出発前の点呼のとき、みんなに「この草は毒草だ、下痢するぞ、この草は食べてもいいぞ」と教えられた。下痢患者もなくなり、みんなも安心して雑草やキノコを食べて喜んでいた。

ソ連の規則では、死亡者が出るとソ連の軍医が解剖して死因を調べることになっていた。日本側の大隊長、軍医などが立ち会って行われるが、伐採による初めての犠牲者が出たとき、栄養失調による疲労が原因とわかっていても、中田軍医の意見は一言も聞かずソ連側のみで処理された。中田軍医は、帰国を夢見て異郷の地に倒れた若人を見てみずからの責任と受けとめ、胸中、無念の涙に暮れていたという。中田軍医は患者に

対する責任感とソ連側との間に立つて悩み、ノイローゼになってどこかに転出された。みんなに慕われていたのに突然の転出で、入院されたのか、将校大隊に行かれたのか、行き先は不明であった。

私は満州の海林捕虜収容所で赤痢状の猛烈な下痢がとまらず衰弱した。仮設の病院に入院して死線をさまよっていると、中田軍医が最後のとっておきの薬としてくださった「征露丸」によって命を救われ、戦友に助けられながら入所し、無事帰国することができた。中田軍医は命の恩人であり、その後のご清祥をお祈りする次第である。

ダットサン

女医ダットサンは、名前をリユーバと言った。独ソ戦帰りの衛生中尉で、小柄な身体に大きな腰を振って元氣よく走り回る姿は、あたかも小型自動車ニッサンのダットサンに似ていた。だれ言うことなくダットサンのあだ名がついた。

ソ連の軍医はほとんどが女医で、外科専門が多かったよう、外見に現れないと病氣と認めてくれなかつ

た。リユーマチや神経痛は幾ら頼んでもだめだった。

日本の軍医との意見の相違はその辺が多かった。しかし衛生面には厳しく、部屋に入るなり「チースト、チースト（きれいに、きれいに）」と、古い床板が白くなるまで磨かせられた。建てられて数十年もたった丸太づくりの囚人の収容所が簡単にきれいになるはずはない。しかし彼女らがたわしがわりに木の枝やぼろ布で磨いて見せた。体の弱った三級の者が掃除当番で残っていたが、こんなだったら作業に出た方がまだとこぼしていた。しかし、そのうちに木の肌が見えるようになれた。

また炊事場の検査は特にやかましかった。毎日朝一番に來て食糧の管理状態、かまや食器から窓、壁、床などの衛生や掃除に、細かいことを自分でやって見せながらうるさかった。帰りにまた寄って実施状態を見て帰っていた。

当時の炊事班の、浅野や室、谷口（神沢）、小原（北村）、鈴木らは、毎日女医に文句言われるのはたまらんと、知恵を絞り部屋を改造して、石灰で白く化粧し清

潔に努めた結果、明るく見違えるようにきれいになった。

その後ハバロフスク地方のお偉方? (将官) の収容所査察で、分所内は立派だ、特に炊事は模範的であると推奨され、収容所長やダットサンは大きな榮譽を受けた。分所及び炊事班には特別にたばこなどが褒賞として与えられた。

病氣に関する治療の薬や設備が皆無に等しい中で、ダットサンの指導は憎らしいほど厳しかった。しかし後になって、まじめな人柄とほとんど病人が出なくなった実績に加えて、人種を越えた医療衛生に対する彼女の誠実な情熱は我々の胸を打つものがあり、二一七収容所の思い出を語るとき、必ず出てくるのがダットサンのエピソードの数々であった。

収容所の食事をエンジョイした自動車隊

二一七収容所の特徴の一つに自動車隊がある。隊長は古川である。そして船津、西郷、町口、坂口らがいる。自動車隊の仕事は、二一七及び周辺数カ所を受け持つ糧秣基地の糧秣運搬や丸太、枕木、建築材などの

木材運搬が主な仕事である。ソ連の運転手は食糧の横流しは当たり前で、コムソモリスクから帰る途中のホルモリーなどで、村人たちに常習的に食糧を流して金もうけをしていた。日本人の運転手もソ連人に見習い役得にあずかっていたが、ソ連の監督も自分たちが食べる程度のこととは見逃してくれていた。しかしゲー・パー・ウー、後のKGB (秘密警察) らに見つかると懲罰大隊行きとなるので、仕事ははじめにして、ソ連側の信頼は厚かった。二一七に対しては小麦粉の九十キログラムの袋入りを途中でそっと下ろしてくれたり、いろいろと便宜を図ってくれていた。また自動車隊二十〜三十人は、収容所内の食事は遠慮していた。パンだけはもらっていたが、食糧は自分たちで都合してソ連人たちと一緒に車庫で自炊をしていた。その分みんなの食事は助かっていた。

自動車隊はホルモリー地区直轄であるが、隊員が二一七の所属になっていたのも、彼らから受けた恩恵は、食糧にしろ、木材の積載量にしても、四年間で大きなものになっていた。

「二一七」の顔、野見山

食事について貢献した一人に、「二一七の顔」野見山糧秣受領係がいる。

二一七に入った一五〇作業大隊は下士官のみで編成された大隊で、兵隊は各隊長や将校の当番及び各小隊に一、二名の当番がただけで、兵隊の数は少なかつた。その一人、野見山は、小路大隊長の当番として二一七に入り、当番のかたわら炊事を手伝い、毎日行われていた糧秣庫から収容所への糧秣運搬、パン受領などをしていた。

パン受領は、当初は四キロ離れたホルモリーの二〇一分所付属のパン工場まで牛そりを引いて、雪と氷の白い道を毎日出かけていた。牛はやがて馬にかわり、パン工場も二〇一から福田が焼いていたゴーリンの手前の二〇五（後の二一九）分所にかわった。このようなパン受領は、二〇五のパン工場が二一七に移転してくるまで一年近く続いた。野見山が受領してきたパンは、炊事にいた谷口（現、神沢）が三百五十グラムの定量に切って、各人に分配していた。

糧秣庫に出入りするうちに、片言のロシア語を覚えた。笑顔で陰ひななく働く彼は、ソローキン主任の信頼を得て専任の糧秣受領係となった。糧秣庫には、ソローキン主任の下にロシア人が三、四名いて、糧秣の整理や分配をしていた。その倉庫責任者はチャイカだった。糧秣庫の受け持ちは二一七分所と二一六、二一八分所の三カ所で、トラックでコムソモリスクから運んできた糧秣を糧秣庫に受け入れ、それを各収容所に分配していた。

トラックから倉庫へ取りおろしする仲仕の仕事は一般作業班から出ていた。倉庫の仕事にはみんな喜んで行った。それは婦りに、袋の破れからこぼれる大豆、コウリヤン、ジャガイモなどを拾って、外套の中に隠し持って帰る役得があつたからである。わざと袋を破ってポケットやズボンの中に隠して持って帰り、友人とひそかに獲物を分け合い、夜遅くまでベチカで炊いて食べるのが捕虜の何よりの楽しみであった。ジャガイモの作業では、雪の中に埋もれたジャガイモを拾って帰り、飯ごうで炊いたところ、半分は馬のふんだった。

た。「ええ！くそ！」捨てようかと思ったとき、腹の虫が「グウー」と鳴った。背に腹はかえられぬと、馬ふんの味がついたジャガイモを取り出して雪で洗って食べてしまった。多くの捕虜が身に覚えのある悲喜劇的物語だが、シベリアでは珍しいことではなかった。

服役者のチャイカが刑期を終えて故郷に帰った後は、野見山が見込まれて倉庫の責任者となり、ソ連人を使って仕事をしようになった。このころ（二十二年）からカントーラ（収容所管理事務所）に日本人を使うようになり、浜田（經理）、続いて犬飼（經理）、小菅（被服）らが入り、後では各係の補助として日本人が働くようになった。計算が速く、まじめなため、多くの人々に信頼され、事務的な仕事はほとんど日本人捕虜の手で行われるようになった。

野見山が倉庫の責任者になって、日本人捕虜収容所のほか、ソ連人や馬糧なども管理しなければならなかった。ソ連人は油や粉末卵などを欲しがったので捕虜の分を回してやり、そのかわりに麦粉や燕麦等、腹持ちのする穀類を多くの収容所に回したりした。また毎

月の倉庫の棚卸し検査では、穀類はもちろん、肉、魚、砂糖など余った食料はこっそり二一七に運び込んでいた。糧秣受領は毎日のことで、長い期間では量、質の双方で大きな利得をもたらしてくれた。

ある日、彼は収容所長ビチコフのサインを一生懸命に練習して、カントーラ（管理事務所）に来て、經理主任ズベリンスキーの補助の犬飼や当時の勤務者の田丸や家人に「どうだそっくりだろう」と自慢して見せてた。「そんな下手じゃ、すぐばれて、監獄入りだよ」と言うと、また暇があれば練習して「もうわかんねえだろう」と得意になっていた。

糧秣受領は、伝票をカントーラの經理主任が発行し、収容所長のサインをもらってから糧秣庫のソロキンに提出して糧秣を受領し、それを二一七の炊事に納める。それが野見山の仕事である。彼のことから、サインを有効に使うて食糧の増配を二一七にもたらしたと思われる。

二回目の正月からつくり始めた正月料理は、質量ともに年々よくなった。炊事班から出されたメニューに

合わせて、それに必要な砂糖や良質の材料を集めるのに「ここはおれの腕の見せどころ」と張り切って、糧秣運搬の自動車運転手に頼んで、コムソモリスクの基地から特別の材料を仕入れたこともあった。

当時は、正月が来るのが楽しみで、今年の特別料理は何だろうか、作業場でも夜の寝台の上でもうわさしながら、みんなが首を長くして待っていた。元旦のみはすべての作業を休んで、朝から全員入浴した。身も心もさわやかとなり、炊事班の苦心の料理を楽しんだ。

「捕虜の糧秣でよくこんな料理ができたな、本職の料理人がいるのだろうか」

と、ゆっくり料理を味わいながら、ちよつぱり日本の正月を思い出した。そして夜遅くまで、故郷の食べ物の自慢話など、食い物談義に夢中になった。シベリアの元旦は、淡い郷愁に包まれた短い一日であった。

しかし、二十四年の正月には、こんなエピソードも生まれた。

入ソして三年目の二十三年の後半になると、糧秣は、

質はともかくも量だけは多くなり、残飯も出るようになった。それに目をつけた野見山は、早速どこからか小豚を二匹連れてきて、炊事の残飯で飼うようになった。彼は乾燥滅菌室の横につくった豚小屋を毎日訪れ、室内をきれいに掃除していた。また豚は、浴場で作業班が帰る前、床屋の柳田らと洗ってやり、かわいがって清潔に飼育していた。豚は丸々と太った。

二十四年の新年を迎えるに当たり、トン汁のごちそうをしてみんなに喜んでもらおうと、二十三年の大みそかに、そのうちの一匹を炊事の望月に頼んで殺してもらった。

収容所長ビチコフがこれを知り、無断でやった豚殺しに腹を立て、望月を捕らえて営倉に入れた。営倉入りは帰国が遅くなるかもしれない。捕虜にとつては大変なことだ。しかし、頼まれて殺しただけの望月は一言の弁明もしなかった。野見山の身代わりに甘んじて、元旦から毛布一枚の営倉生活を送ることになった。二一七収容所の、助け合い、友情に包まれた隠れた逸話の一つである。

(※後日談——帰国後、野見山が望月の家を訪れたとき、「いやー、あのときは野見山さんは偉い人で、頼まれてやったなどとも言えなかった、黙って犠牲になるしかなかった」と言われ、野見山は大変恐縮して、会う人ごとに、望月が営倉に入ったことは知らなかった、悪いことをした、悪いことをしたとみんなに断り続けている)

野見山は、二十年十二月の入ソ当初から二一七収容所に入り、二十四年九月、帰国のため、正門の扉を閉じ、くぎづけした一人である。彼は常に表に立たず、私欲に走らず、みんなのために四年間努力した。二一七の陰の功労者であった。また、ソ連人からも「ノミヤーマ」と人気があり、まさに「二一七の顔」であった。

帰国へ

私たちが着いたところは農場のある収容所で、たしかホルモリーの二〇二ではないかと思われる。ここでは大した仕事もなく、昼は農場の手伝い、夜は私が「共產党小史」などの勉強会をして過ごした。八月にコム

ソモリスクに移動。そして十月にナホトカに集結して、二十四年十一月一日舞鶴上陸の信濃丸で帰国した。

この船には、二一七を閉鎖してきた最後の組の佐藤団長、野見山糧秣係、浜田通訳、犬飼カントーラ、福田パン工場係らと、他所に転出していた北村民主委員長、田中元大隊長、小松崎文化部長外、多くの二一七の仲間が一緒になった。舞鶴の宿泊所ではささやかな別れの茶話会をして、それぞれの故郷に帰った。

【執筆者の紹介】

家人壯介氏は大正十三年五月十一日の生まれで、熊本県阿蘇郡にて生活が続けておられます。

入営前は国鉄熊本鉄道管理局施設部におられ、昭和十九年十月十五日西部第二二部隊に入隊、同年十月二十八日満州工兵第一連隊(ハイラル)に転属、甲種幹部候補生に採用され、昭和二十年七月一日チチハル関東軍工兵幹部教育隊(満州第二八九部隊)甲種幹部候補生第三期生として入隊、終戦を迎える。

昭和二十年十二月 入ソ(ハバロフスク州第五地区

第二支部二一七收容所

昭和二十四年十一月一日 舞鶴上陸（信濃丸）

昭和二十四年十二月 熊本鉄道局に復職

昭和五十五年四月 定年退職

昭和五十五年四月 三軌建設南九州支店入社

昭和六十年八月 第三セクター南阿蘇鉄道入社

昭和六十二年九月 右退社、現在に至っております。

平成六年七月二十五日には、シベリアの抑留記録誌

「シベリア二一七捕虜收容所」を発刊されました。

（埼玉県 山口 秀夫）

私の青春はシベリア抑留

福井県 天谷 小之吉

一、昭和二十年八月二十日

十九日の昼過ぎまで両方共に撃ち続けたが、それ以後は、日本側もソ連側も弾を撃たない静かな、まるで気の抜けたような戦闘状態と変わった。そしてそのこ

ろ、こんなうわさが流れていた。「敵のスパイによる宣伝に騙されるな」と注意が出た。「日本軍は戦争に負けて降参したのだ、この陣地だけが戦っている、ほかのところは武器を捨て内地へ帰る準備中だ」、しかし、事実こういう使者が何人も来たそうだが、敵のデマとして全部撃ち殺したらしい。後方から来る通信（無線）も、敵の謀略として一つも取り上げなかったらしい。そのため、北鎮台陣地はほかの陣地や部隊より数日遅れてしまった。そしていつごろだったか、白旗を持ったソ連軍人と日本軍人と、そして通訳らしい三人が、孫呉方面より決死隊となつて我が陣内の軍用通路を北上してきた。

北鎮台陣地の最高司令官浜田十之助閣下に交渉に行くんだと悲壮な顔色だった。それもそのはず、今までの使者は一人も戻つて来なかった。途中で皆射殺されていた。このことを承知の決死隊、実に立派な者だった。もしこの方々が来てくれなかったら、戦争はまだまだ続いていただろう。そして、犠牲者ももっと沢山出たことと思う。この方たちの勇気ある行動、そして